

## [ワークショップの趣旨]

これまでの語彙意味論は、主に LCS (語彙概念構造) という意味表示システムを用い、動詞の真理条件的意味を記述分析することを通して同値類を括り出し、統語構造との関係を議論することに主眼を置いて研究を進めてきた。Pustejovsky (1995)以降では、非真理条件的意味も特質構造の主体役割や目的役割に属する意味要素として一部扱うようになり、対象を名詞や形容詞、不変化詞へと広げていった。一方、語用論の分野では、1990年代以降、Grice (1975)を発展させた関連性理論の枠組みの中で語彙語用論 (Lexical Pragmatics; Blumstein 1998 等)が派生してきた。

Wilson (2003)は、語彙意味論と語彙語用論の違いを次のように述べている。

- (1) The goal of lexical semantics is to investigate the relations between words and the concepts they encode, and the goal of lexical pragmatics is to account for the fact that the concept communicated by use of a word often differs from the concept encoded. (Wilson 2003)

しかしながら、(1)においてもそもそも「コード化された意味」が何なのか、実際の使用における意味がどの程度「コード化された意味」から予測(不)可能なのかについては明らかでない。また、語彙の意味に深く関わる語用論の意味として、Grice (1975)が提唱し、Potts (2005)によって形式的分析が可能となった「慣習的推意 (conventional implicature; CI)」があるが、主に真理値に関わる意味を扱ってきた語彙意味論の立場として、語彙の意味の一部である慣習的推意をどのように扱っていくかについて共通した見解があるわけではない。

このような現状を踏まえて、本ワークショップでは、主に語彙意味論の立場から、百科事典的知識や CI といった、これまでではどちらかといえば分析の周辺部にあつたと思われる意味要素を中心に据えて議論し、改めて語彙の意味と語用論の意味の境界や両者の関係および関連する統語構造について考えていきたい。

## [ワークショップの構成]

1. ワークショップの趣旨説明および導入 (10:00-10:15) : 中谷健太郎
2. 口頭発表 4 件 (10:15-11:35) : 1. 澁谷みどり 2. 木戸康人 3. 日高俊夫 4. 森山俊成 (各 20 分)
3. 全体の総括および 質疑応答 (11:35-12:00)

## [各発表の題目と要旨]

## (導入) 意味の諸相

ことばの意味には言語的意味と言語外の意味の区別があると言われるが、研究が進むにつれてその区別は従来考えられているほど単純ではないことが明らかになってきた。本導入ではことばが惹起する<言語内・外>の意味の諸相を特に語彙意味論の観点から簡単に紹介する。

## (発表 1) 動詞「掘る」の多義性について

「掘る」にみられる次の3つの用法のうち、「土を掘る」や「芋を掘る」に観察される慣習的な読みは、動詞と目的語名詞句との間にタイプ強制が起き、「地面を掘る」や「芋を掘り出す」と同様の解釈が可能となることを議論する。

- (1) a. 土を掘る            b. 芋を掘る            c. 穴を掘る

そこで、まず「土」のような名詞句タイプは、次のように形式役割と構成役割から構成される natural タイプとし、動詞「掘る」との共起により type selector (Pustejovsky, 2001) が機能すると主張する。◎は、構成的な関係をあらわす constructor (Pustejovsky, 2001) である。

- (2) 地面/土: mass: 地面 ◎ 土

次に、「芋」のような名詞句タイプを次のように考え、このタイプの名詞句に目的役割が指定されることで Conventionalized Attributes (CA) (Pustejovsky & Jezek, 2008) が導入されると考える。

- (3) 芋(s): food ⊗ eat/use → CA: {s は土に埋まっている → s は掘り出すモノ}, where s comes to have a TELIC role

「土を掘る」は「土」のもつ多義性を生成語彙論 (GL) (Pustejovsky, 1995) のクオリアで表記し、「土」と「地面」のような換喩的表現はどのように生成されるかを検証する。一方で「芋を掘る」は慣習的な知識・情報がタイプ強制により「掘り出す」と同じ解釈を持つようになることを説明する。

### (発表2) 3種類の *kko* —接辞と慣習的推意の接点—

本発表では、日本語に3種類の *kko* という拘束形態素があることを示す。第一に、(1)に示すように、「子ども」の意味を保持したまま「っ子」と語彙化しているものである。

- (1) (Type 1) a. 場所+っ子: 江戸っ子、地方っ子 など b. 時代+っ子: 現代っ子、輝く未来っ子 など  
b. 属性+っ子: 鍵っ子、テレビっ子、ちびっ子、ぶりっ子、一人っ子、お兄ちゃんっ子 など

第二に、指小辞を基にした「っこ」(Type 2)である。具体的には(2)に示すように、指小辞(diminutive)としてのものと(3)に示すように、NPIとしてのものと(4)の接中辞(infix)としてのものがあると記述する。

- (2) 指小辞としての「っこ」 a. 場所+っこ: 隅っこ、端っこ など b. 幼児語: 抱っこ、ごっこ、しっこ など  
(3) NPIとしての「っこ」 a. それはできない vs. それはできっこない b. それはできる vs. \*それはできっこある  
(4) 接中辞としての「っこ」 a. 動詞: 落っこちる (<落ちる)、引っこ抜く (<引き抜く) など  
b. 掛け声: よっこいしょ (<よいしょ) など

第三に、「ごっこ」を語源とする「っこ」(Type 3)である。この「っこ」には、(i)「遊び感覚で何かを誰かと一緒に競争すること」を表すと考える。そのため、意味的に非対格動詞には付かないことを観察する。(ii)「っこ」は Split Control の1つであることを示す。(iii)「っこ」が動詞の連用形に付くと、Verbal Noun になる。

- (5) (Type 3) a. (追い)かけっこ、教え(合い)っこ、かけっこ など b. \*降りっこ、\*ありっこ、\*切れっこ など  
また、Type 2 と 3 の「っこ」は慣習的推意として、「子供っぽさ」とそれぞれ異なる慣習的推意を導出する。  
(6) 太郎にそんなことできっこない。(Type 2: NPI)

At-issue: Taro cannot do such a thing. CI: The speaker emphasizes on negation and acts childishly

このように、日本語には語彙化した「っ子」(Type 1)と指小辞を基にした「っこ」(Type 2)と「ごっこ」を語源とする「っこ」(Type 3)があることを示した。本発表の分析が正しいのであれば、本発表は語彙部門だけでなく統語部門にも語形成を認めるモジュール形態論(影山 1993)を *kko* という拘束形態素の記述一般化の観点から支持するものである。

### (発表3) 「普通においしい」は何が普通なのか?

「普通においしい」という表現をインターネット検索すると、「普通に」は「期待通り」「なかなか」「そこそこ」「とても・非常に」「お世辞抜きに・素で・他意なく」等、様々に解釈されることがうかがわれる。本発表では、このような「普通に」の新用法を、「客観化」「(間)主観化」に基づく、①スケール種の指定、①話し手の、命題に対する聞き手への態度表明といった、CI 表現への拡張として捉える。また、近代から現代にかけて一部同様の変化を受けたと考えられる「正直、彼は苦手だ」のような文における「正直 $\phi$ 」の歴史的利用データを提示することによって、本発表の妥当性を補強する。

### (発表4) 節周縁部と「じゃないか」系表現

本発表では、日本語における「じゃないか」系表現の統語的な振る舞いについて生成文法の枠組みに基づいて考察する。日本語の記述的な文法研究では「じゃないか」系表現に関する論考が数多く存在するが、生成文法の枠組みではあまり議論されておらず、議論の余地が十分に残されている。本発表では、(1)の「じゃない」はCP 領域より構造的に下位に基底生成される一方で、(2)の「じゃん」や関西方言の「やん」はCP 領域(RJP (Recognition-Judgment Phrase))の主要部に基底生成されると主張する。丁寧語等の文末形式との共起関係からこのことを示す。

- (1) a. もしかして今日は休みじゃないか? b. だから言ったじゃないか。  
(2) a. だから言ったじゃんか。 b. だから言うてたやんか。

さらに、統語と語用の接点についても論じる。具体的には、「じゃん」と「やん」では、(3)のように、丁寧語との共起の可否に差異があることを観察し、慣習的推意(conventional implicature)の観点から説明を試みる。

- (3) a. \*だから言うてましたじゃんか。 b. だから言うてましたやんか。

「じゃん」と丁寧語の共起が許容されないのは、「じゃん」の持つCIと丁寧語が生み出すCIの間にミスマッチが起こるためであると論じる。